【３３回生の皆さんへ】

4/30(木)

≪学年からのメッセージ≫

今日で４月も終わり、２０２０年度もいつの間にか折り返しになりました。休校で空っぽになった教室棟に足を運ぶと、イソヒヨドリやウグイスが校舎に美しい声を響かせているのに気が付きます。日が傾き始めると、カエルの低い合唱も聞こえてきます。毎年、この季節の時期を教えてくれる変わらない西陵の景色です。

新型コロナウィルスのために私たちは今までに経験したことのない毎日を送っているのですが、これまでも世界中でペスト・黒死病、スペイン風邪、天然痘などのパンデミックが繰り返されていたことは歴史が教えてくれます。しかし、現在が決定的に違うのはこの病に関する情報量でしょう。インターネットを通じて国内だけでなく、海外であっても感染者が何名で、亡くなられた方が何名で、とほぼ時差なく知ることができます。では、昔の人たちはどのようにこのような厄災と向き合っていたのでしょうか。絵画や文学、彫刻などの芸術作品にその一端が垣間見られます。災いの収束を祈り、願うためにつくられた仏像や目に見えない病を鬼として描いた絵巻や民衆を惑わすデマを言いふらす人間のそばに悪魔が耳打ちしている様子を描いた絵画がパンデミックに苦しんだ後の日本やヨーロッパの国々で残されています。また、最近ネット上で多くのアーティストが『アマビエ（アマビコ)』を題材とした作品を発表しています。この「妖怪」とも、「あやかし」ともとれるアマビエという不思議な生き物は江戸後期のかわら版（今の新聞のようなもの）に最初に登場したそうです。肥後国(今の熊本県)の海に現れて豊作と疫病を予言し、自分の姿を写すように告げたということです。明治時代のコレラの流行時にも感染防止のお守りとして人々の間に広がったことが記録に残っています。これらの作品を見ていて思うことは、人間が美しさとユーモアを失わずに逞しく生き抜いていることです。

今、私たちが多くの芸術作品に触れることができるのは、どんなに困難な状況であっても必ず終わりがあるということも意味しています。この見えない病原体に対して、正しく恐れて正しく向き合いながら、今できることを精いっぱいやっておくこと。必ずこの状況も終わるという希望をもって、理性と感性を磨きつつ、ホトトギスの声を共に聴くことを楽しみに待ちたいと思います。(F)

≪数学科からのメッセージ（２・３・６組向け）≫

本日の課題は、数学Ｂの「ベクトル」からの問題でした。
右側の問題、ｓとｔの値を求めたい。ということは２つ式を立てたい。
外心は垂直二等分線の交点なので、垂直条件で立式できる！解ける！
という流れだね。左側の２題目の計算方法も確実にマスターしておこう。
がんばれ！　　＜Ｈより＞

ともにがんばろう！３３回生
３学年団より